



広島復興の関係者らが証言したテープを市公文書館に寄せた石丸さん(左) (撮影・福井宏史)

戦争体験の声紡ぐ

1000人目標 ネットラジオで配信

元新聞記者・広島の前川さん



被爆者の大岡さん(右)にインタビューする前川さん

インターネットラジオ番組の企画・制作を企画・制作している元新聞記者の前川洋平さん(33)は、広島市安佐南区に、原爆や空襲体験者を自ら取材し、集めた肉声の証言を「戦争の記憶」と題してネット上で配信している。「ライフワーク」と位置付け、千人のインタビュー収録を目指している。

前川さんは、中国新聞記者などを経て2009年、インターネット



市公文書館、

に国の戦災復興院で決定された復興計画に込めた考えを詳しく証言している。

「広島は川の都市だから河岸緑地を重点とし、100道路(現平和大通り)はグリーンベルトの考えで線を引いた。平和記念公園は、ドームを中心に原爆を記念する公園にしようとする市民の反対を押し切った」

市公文書館の中川利国館長は「苦闘と葛藤が織り成した復興の内実を伝える貴重な記録だ」と話し、内容を精査して公開する考えである。

していた時、原爆についてあまりにも知られていない現状に、戦争の風化への危機感を覚えたのがきっかけ。終戦から70年近くなち、体験者の記録を残しておかないといけないと強く思い始めた。複数の知人からも背中を押され、昨年夏から取材・収録を進めている。

これまでに広島県内や横浜市、東京都などに住む14人から被爆体験や戦時中の暮らし、若い世代へ伝えたいことなどを聞き取った。

広島市江波町(現中区)の自宅で被爆した大岡貴美枝さん(92)は「中二からは、ガラス片が顔に刺さってけがをした体験などを聞き、戦争ほど惨めなものはない」と話している。

早川さんは「若い世代に託すメッセージも含めて、多くの人に聞いてもらい、平和について考えるきっかけにしてほしい」と話している。証言を英訳するボランティアや、証言してくる人を募っている。「戦争の記憶」のアドレスは <http://ind/memoriesofwar>、早川さんのメールアドレスは igtas.jp (増田咲子)



寄贈された詩誌「われら」を送る土屋代表(左)と原爆

「われら

被爆70年の2015年8月6日に向け、中国新聞社は読者や地域の皆さまから、原爆による惨禍と平和への願いを刻む資料を募っています。原爆投下で人間はどうなったのか、どう生きてきたのか。「伝えるヒロシマ」

「伝えるヒロシマ」

日記や写真を募る

と題して、貴重な資料をなげ特集紙面で紹介し、外国語でもウェブ発信します。866語です。家庭や学校、企業、町や団体などをお持ちの遺品、書き残されていた日記や書簡、絵、撮られていた写真…。皆さまと共(電子に掘り起し)、未来につ